

住い方の文化人類学的考察

栗田靖之 (国立民族学博物館 助教授)

調査の方法

私は1975(昭和50)年以来、現代日本人の物質文化を研究するために、日本とヨーロッパ都市家庭の内部を写真撮影する調査を行ってきた。その調査のあらまは、次のようなものである。

1975年には、関東、関西にわたって、140軒の家庭の内部の写真をとった。この際、できる限り間取りを一定にするよう心がけた。一番小さいタイプの住居として2Kといわれる台所と2つの部屋を持った民間アパートを32軒、つぎは日本住宅公団の2DKタイプの家を54軒、第3には4Kないし3DKタイプの住宅を25軒、いちばん大きなタイプとして、5DKの分譲住宅を29軒、合計140軒の住宅の内部をくまなく写真撮影した。

1976年には、関東地方を中心とする16軒の家庭のなかに、72時間連続撮影が可能なビデオテープレコーダーを設置し、LDK(リビング・ダイニング・キッチン)やDK(ダイニング・キッチン)とよばれる現代の家庭の茶の間での、人びとの行動観察を行なった。

また1978年には、ロンドン、パリ、デュッセルドルフの3都市でそれぞれ5軒ずつ、合計15軒のヨーロッパ都市家庭の内部を写真撮影した。

1982年には、ふたたび103軒の日本の家庭で、同じくその内部の写真撮影を行ったが、その内の40軒は、1975年に写真撮影を行った家庭の追跡調査である。この調査はいうなれば、この7年間、日本の家庭の中でおこった変化を追跡調査したものである。

これらの調査はすでに報告されている〔商品科学研究所ほか、1980、1983〕。ここでの報告はこれらの調査にもとづくデータによったものである。これらの調査に際しては、日本、ヨーロッパのいずれの調査対象家庭にも学齢期の子どもが居ることを、その条件とした。

これらのデータをもとにして、本稿においては、住い方について文化人類学的な考察をしたいと考えている。

門 扉

団地やマンションなどのいわゆる集合住宅の入口は、ほとんどすべてが、規格化された鉄の扉である。形も色も、そして音までもが没个性的なこの現代の門構えは、その中で営まれている生活を、かたくなに防衛している。かっ

ての日本のアパートの扉はすべて内開きであった。日本のアパートの原型をなしている東京の同潤会アパートの扉も内開きである。しかし今日の集合住宅の扉はその大半が外開きである。これはいうまでもなく玄関スペースを節約したためである。しかし、安全性という面から考えると、扉は内開きのほうが良いのではないだろうか。すなわち外からの侵入者に対して内開きの扉なら、女性の力でも防御できるが、外開きの扉では、どうしても開けられてしまうのである。

さて、伝統的な日本の住まいでは、門構えは、その家の格式を雄弁に物語っていた。武家屋敷やお寺の門構えをいいたすまでもなく、農家でも庄屋になると門があった。江戸の町でも、町内には木戸があって、夜はそれを閉じて外部との往来を禁じていたのである。

門は塀と対になっているものである。そして塀や壁は、大きな世界の中に、別のひとつの世界を区切り出す役目をはたしている。たとえ簡単に乗り越えられるような芝垣や竹垣であっても、塀や壁でかこまれた世界は、そこが、外界とは違った別の世界であることを宣言するための手段であった。そして門は、ひとつの世界から別の世界へ入ることが許される、唯一の通路である。

門以外のところから出入りすることは、不法行為なのである。門は、それをくぐるときに、「世界が変わる」という緊張感をうみだすための仕掛けであった。

また門は、マレビットとしての客を迎え入れるためのものであり、通常家人は門から出入りはしなかった。ちなみに沖縄地方では、門は嫁入りと葬式のときにしか開かれなかったのである。大門の脇の小門、または勝手口から出入りしたものである。しかし、今日では、この勝手口という言葉が死語になってきている。集合住宅には、勝手口というものが無い。マレビットも住人も、ひとつの門から出入りしているのである。

玄関と下駄箱

この現代の門である鉄の扉を開けて入ると、そこは玄関である。集合住宅に一步ふみいれると、まず第一に、どこの家の玄関も似たようなものだ、という印象をもつ。まず、壁に沿って、下駄箱が置かれている。下駄箱というのは、昔からの呼び名であって、現在ではその中には

靴が入っているのだから、靴箱と呼ぶのが正確であろう。考えてみれば、靴箱が玄関に置かれていること自体、日本人の住まいの文化を如実に物語っている。

大正時代以降、とくに戦後になってから、日本人の住生活もずいぶんと西欧からの影響をこうむった。しかし、その一方で頑固なまでに伝統的な生活習慣を守っている部分もある。

その伝統的な生活様式を守り通しているものとして、家の中で靴を脱ぐ習慣がある。すっかり洋風化した暮しをしている都会のマンションを訪れたとしても、また海外で長く生活した人の家を訪問したときでも、靴をはいたまま、室内に通されることは、めったにない。靴をぬぐ習慣は、日本の暮しのひとつの大きな特徴である。

家の中で靴を脱ぐのには、文化的な要因があるようである。それは、私たちの生活の中にある、カミとシモ、ウチとソトを区別するといった意識の問題である。家の外の世界は不浄であり、その不浄さを家の中に持ちこんでくることへの抵抗感といったものである。

さて、玄関の下駄箱を見ると、その上には花がいけてあったり、観賞植物の植木鉢や金魚鉢などがのっている(図1, 2参照)。そして、その上の壁には、多くの家庭では鏡が掛けてある。鏡でない場合は、複製の名画などが掛っている。

このごろの下駄箱の天板の厚さが、8センチにもおよぶものがあるという。なぜ玄関にこのような豪華な下駄箱が登場するのだろうか。このことを考えるためには、現代家庭における客について考える必要があるだろう。現代の集合住宅においては、大半のちょっとした用事の客は、玄関で対応することになる。本来ならば、応接間に通ってもらうべき客を玄関で対応するのだから、「門前払い」や「玄関払い」の印象を与えないためにも、現代の玄関には、応接間的、ないしは座敷の雰囲気をもたせる必要があった。そこで玄関にある下駄箱を見ると、木目調の色彩、厚い天板、その上に飾られた活け花や壁の装飾など、じつは、現代の下駄箱は本来は座敷にある「床の間」の役割をはたしているのである。下駄箱の天板はまさしく床板なのである。下駄箱をあたかも床の間のように飾りつけることによって、玄関で客に対応する失礼を多少とも緩和しようとしているのである。

現代の集合住宅の玄関は、客にたいする唯一の防衛線なのである。よほどの客でないかぎり、この一線を越えて内側には通されない。この狭い空間での立ち話による接客対応に、少しでも色どりをそえるべく、玄関は、ただ単に客を迎え入れるための出入口以上の役割を負わされているのである。

さて玄関を越えて内に招き入れられた客は、靴を脱いで家にあがる。下駄箱と対をなして、玄関にはスリッパがあり、客はそのスリッパをはくことになる。このスリッ



図-1



図-2

パの使い方にも、われわれの生活の文化がうかがえる。床が木張りであるとか、絨毯張りの場合は、そのままスリッパをはいたままでもかまわない。しかし、下が畳の場合はスリッパを脱がなければならない。どのようなものの上をスリッパで歩けるかというのは、かなり文化的な要素である。どうも、われわれが寝そべっても良い空間ではスリッパははいていけないようである。

そのスリッパの日本的な利用の典型的なもうひとつの例は、便所のスリッパである。たいていの日本の家では、便所では別のスリッパにはきかえる。便所は不潔だから、その不潔さを外部に汚染させないために、便所の中では別のはき物を用いるというのが、一般的な考え方であろう。

しかし、アメリカやヨーロッパの家庭では、この便所専用のスリッパというものがない。日頃の生活では、室内ではいる靴のまま便所に行き、そのまま帰ってくる。スリッパは寝室で用いることが多く、あまり昼間からスリッパをはくことはない。そうしてみると、アメリカやヨーロッパの家庭は、たいへん不潔だということになる。どうも便所のスリッパは、本当に不潔かどうか

問題になっているのではなく、これもまた、浄、不浄の観念に基づいたものであるといえよう。

現代の客間

現代の住居を例にとると、応接間とよべる来客用の部屋が現れるのは、五部屋（5 DK）以上の広さを持つ家である。それより狭い家では、とくに来客用のための部屋はないので、普段の茶の間に通されることになる。いわゆるダイニングキッチン（DK）やリビングダイニングキッチン（LDK）が、現代の茶の間なのである。

私たちのVTR調査でも、興味深い例が観察された。調査期間中に玄関から中にまねき入れられた何人かの客が、テレビの画面に映し出されていた。その客の大半は、その家の主婦の客である。DKタイプの家では、このような客は、ダイニング・テーブルに案内されていた。そしてダイニング・テーブルでお茶やお菓子を出してもてなしをうけている。ダイニング・テーブルはただ単に家族のための食卓だけではなかったのである。これはまた、来客のための家具でもあった。

かつての日本の家には座敷という客のための空間が準備されていた。その座敷の空間の中にも、床の間を背にしたカミ座と、出入口に近いシモ座とがあり、座敷空間はその格において均一ではないのである。カミ座・シモ座を取り違えることは、この上もなく無作法なことなのである。このような席次に極端にうるさいやくざの集団では、たとえば喧嘩の仲直りの場では、カミ座・シモ座の区別をなくするために、わざわざ「四方同席」という張り紙をしたという。

かつての座敷は客のための部屋であったが、部屋だけでなく私たちの生活の中には、生活道具にも、普段づかいと、客用の区別がある。たとえば、座ぶとんひとつにしても、普段づかいのもの、客用のものがあって、かなり厳格に使い分けしているようである。それでは、現代の客はどのようにもてなされているのだろうか。

私たちのビデオ調査においても、調査期間中に16軒の調査家庭のうち、10軒の家庭で訪問客があった。ビデオを通して見た接客風景は、そんなにかたくるしいものではなかった。客はダイニング・テーブルかこたつに通されて、お茶やお菓子を出される。客というよりも、内輪の延長、たとえば隣り近所のおばさんや子供たちといった家族的なものであった。

しかし、一方では興味深い現象も観察された。それはビデオによる調査がはじまって72時間後、すなわちカメラを設置したから3日目に、われわれの調査員は、「今からカメラとビデオを回収にうかがいます」と電話をかけてから、調査家庭を訪問した。じつはこの電話は、「これからあなたの家に来客があります」という予告でもあった。この電話を受けてからの主婦の行動が、ビデオ

の中に記録されている。それによれば、電話を受けた主婦は、かならず部屋の中を片づけるのである。ソファの位置をなおしたり、床の上のゴミを拾ったりする。あるいは、子供が遊んでいたおもちゃを片づけさせる様子が、見事にとらえられていた。

これらの光景を見ていると、DKやLDKに住む主婦にとって、予告されるとやはり客というものがある種の緊張を生むものであることが明らかである。

リビング・ダイニング・キッチン（LDK）は、アメリカ開拓期のクエカー教徒によって作り出された住いの形式であるという。クエカー教徒の主張は、「この世の人びとは、すべて兄弟である。だから兄弟のために特別の客間や食堂など必要ではない」というものである。LDKは、このような主張のもとに生み出された住居形式なのである。しかし皮肉な表現が許されるならば、今日の生活者は、客のために特別の空間を準備できないような建築物の中に身を置かざるを得ない事情から、その結果として、クエカー教徒の心情を容認せざるを得なくなったのであろう。意識が住居構造を変革させたのではなく、住居構造が意識を変革させたのである。いずれにせよ、われわれは狭い家に住んだがために、「この世の人びとは、すべて兄弟である。だから兄弟のために特別の客間や、客を招じる食堂など必要ではない」という心情に好むと好まざるにかかわらずならざるを得なかったのである。

玄関と勝手口について述べたように、現在の住居には、ハレ（晴）と普段のケ（藝）の場が明確に区別されていない。このハレとケの場の混在をLDKにおいて見てみようと思う。

かつての日本の住居では、客間としての座敷があり、この座敷はソト向きのハレ（晴）の場として、普段は子供たちがそこで遊ぶなどは、もってのほかであった。それに対して、茶の間はケ（藝）の空間で、そこはひと目を気にしない、居心地本位の空間であった。すなわち、同じ住まいの中で、先に玄関と勝手口でも見たように、ハレの場としての座敷とケの場としての茶の間は明確に分離されていたのである。しかし、客間を持たなくなった現代の住まいは、LDKという空間において客間と茶の間の癒着がおこった。

このような空間においてまれにしか起こらないハレに対して、たえず身構えるということは、くつろぎという行為とは矛盾するものである。たしかにこの矛盾から生じる緊張感が、現代の茶の間であるLDKの質を向上させたといえるだろう。しかし同時に、もし住人がLDKを茶の間として完全にくつろぎの場にしたいと望んでいるのなら、たえず客に対して身構えるという緊張感はLDKを大変居心地の悪いものにしてしている。このように考えるとき、日本の家が狭きゆえに客間をなくした意味は

大きいといわなければならない。

今日の日本の家庭がはたしている大きな機能は、子供の養育と大人の情緒安定の場としての機能であり、ほぼこの機能だけがはたされているといっても過言ではあるまい。家庭が子供中心に営まれるようになって、家庭の中での大人の影が急速に薄れてきているようである。大人の世界と子供の世界というきっちりとした区分は、今日のヨーロッパやアメリカの家庭には今も残っているし、かつての日本の家庭にも存在していたものである。

しかし、今日の日本家庭をつらぬくひとつの原則は、「家は女、子どものためのもの」であるというものである。すなわち、現代の家庭の中から、男性の大人の遊び場といったものが失われているのである。このための客間を応接間と呼ぼうが、書齋と呼ぼうが、座敷と呼ぼうが、それはいっこうにかまわない。しょせん、その空間で行なわれていることは、大人の遊びなのである。考えてみれば、われわれの親の世代では、近所のご主人がフラリと碁を打ちに来たりしたものである。そして客が座敷にいる限り、茶の間の子供には被害はなかった。

この大人にとっての遊びの空間をなくしたことが、家庭の中に老人を居心地悪くさせ、また地域社会との結びつきを失わせて、自閉的な生活を送っている現代家庭を生み出したひとつの原因となっているのだろう。

文化人類学者の石毛直道氏は、いろいろな文化圏の住居を調査して、人間の住まいの文化を明らかにした〔石毛 1971〕。その中で石毛氏が見つけ出したもののひとつに、ほとんどの民族の住居には、客のための空間というものがあるということである。このことは、客というものは、主人が許した空間内に入れる人のことである。客というものは、いかに親しい人であっても、その根底は自らのテリトリーへの侵入者である。それゆえ、客には客として許される空間と振舞いがあり、それをわきまえなければならないということであるらしい。たとえ涙を流して別れた客であっても、客というものは、帰ったあとは、ホッとするものである。

かまど

われわれの「いえ」という言葉は、かまどを意味する he という言葉に、前頭詞の i が付いて、ihe(イエ)となったという。古代ギリシャ語やフランス語イタリア語の古語、またロシア語、ヒンドゥー語においては、家族という言葉はカマドないしは火という言葉が語源としている。またチベット古語では煙という言葉が家族を表す用語であった。このように、「火」や「煙」という言葉が、家族を象徴していることを見ても、家の中における火とその火をかこうカマドが、人類の生活史の上で、いかに大事に考えられていたかが分かるのである〔中根 1970〕。

かつてのわが国の農家では、台所は座敷から一段低い土間にあった。それは火や水を使うからであり、沖縄地方では、台所だけを別棟に建てる二棟造りという形式もあった。しかし、日本の各地では、土間にカマドをすえた形で煮たきものをしていたのである。かまどは地方によっては、「へっついさん」、「おくどさん」などと親しみを込めて、「さん」づけで呼ばれたりしていた。かまどにしだをくべて、火吹き竹で火をおこす。これは、早朝から女の仕事であった。火をもやすということは、妙に心の落ち着く行為である。女たちはこのかまどの火をもやしながら、日頃の暮しの中での不平を、ブツブツとつぶやいたものだという。かまどはこのように、何代にもわたる女のつぶやきを聞き続けてきたのであろう。そしてその結果、「へっついさん」や「おくどさん」という「さん」づけでよばれるようになったのであろう。

この黒びかりしたカマドの上には、火の用心のお札や、神様が祭られていた。まきで火をおこすには、消し炭を入れたり、しだをくべたりし、また時には煙にむせたりして、今日では想像もつかないほど、技術のいる仕事であった。ちょっと気を抜くと、けむってしまったたり、燃えつきたりした。その上、たえず火事の心配があった。火というものは今日よりも、もっと野生を持ったものであった。このように火は神聖視され、カマドは家の象徴でもあった。

そのようなカマドの例として、沖縄地方では、カマドの神はそれをとりかこむ三つの石に代表され、それはピーヌカンと呼ばれて、姉妹を通じて継承される家の守り神でもある。

柳田国男によれば、同じ火で調理されたものを食べるということは、家族の結合のためには大切なことであった。その逆に、別の火で調理されたものを食べるのは、病人、産婦、忌中の者など特殊の場合に限られ、別火だてと呼ばれたという。

食 事

今日では一家が集い談笑のうちに食事をすすめるという食事の形態が普通であるが、この家庭の中における食事のとり方も、また時代によって異なるものである。

江戸時代の武家の社会では、主人が家族とともに食事をとるということはなかった。主人は座敷に端座し、別膳で一人で食事をした。主婦は、その側に座り給仕した。江戸時代の商家においても、小僧、丁稚とよばれる使用人は、箱膳とよばれるお膳で食事をしたのである。そのときには、「早飯、早糞」が奨励されており、けっして落着いて食事をするというものではなかった。

大正から昭和になってチャブ台という食卓が普及し、一家がそろって食事をするようになってからも、食事の作法は、どの家においても厳しいものであった。子供た

ちは、食卓の前では正座させられていたし、食事の前には、手をあわせて、「いただきます」と神仏に感謝した。また食事中は、むやみに話をするのは無作法なことで、ご飯は黙ってさっさと食べるもの、というのがしつけの基本であった。

私たちのビデオによる調査では、それぞれの家庭での食事の様子を、つぶさに観察することができる。まず驚かされたのは、日曜日から金曜日までの週日の夕食を父親が家族と一緒にとった家庭は、一軒もなかったことである。平日の朝、父親はコーヒーとパンなどの食事を取り、夜は夜食程度の軽い食事しかとっていない。また、夕食をとらない日もある。この結果、統計的には、父親の家庭での食事時間は、一日18分間ということになる。

それに対して、母親と子供の食事時間は、一日で平均30分間、夕食だけに限れば、およそ20分間である。主婦は父親の夕食につきあう場合も多いので、二度の夕食をとることになる。夕食時に子供にテレビを見させている家は、約半数であった。

食事の準備と後かたづけに関してみると、主婦は一日合計平均2時間18分かけていた。しかし、主婦のこのような仕事を子供が手伝っていた家は、16軒の内、1軒だけであった。

ものの組み合わせ

台所の設備や道具は、現代家庭の合理化の最前線であった。マキからガスへという燃料の転換は、台所の室内化を可能にした。その後、ミキサー、ガス湯沸しからはじまった家庭電化は、電気炊飯器、電気冷蔵庫、そして換気扇などの新製品が台所にもたらされたし、魔法ビン形のポットも普及した。

さて、このように、日本人の台所は生活合理化のために、色々な設備を取り入れてきたが、現在の台所の特徴は、ものがあふれかえていることである。

食器ひとつを例にとってみても、茶碗、湯呑みといった和風の食器、大皿やコーヒー茶碗といった洋食器、中華鉢などの中華風食器、その上に、夏には涼しさを演出するためのガラス食器、また普段には使わない客用の食器など、和洋華に加えて、夏冬、客用と幾重にも品揃えしている現実がある。

われわれは、これほどまでもものを持たなくては生活できないのだろうかという疑問を持ってしまう。たしかに、みそ汁をスープ皿に入れても、さしみを洋皿に盛っても、ラーメンを塗碗に入れても、食べるという機能においては、何らかわることはない。しかし、何かチグハグな感じがする。一向にかまわれないと思いながら、やはりチグハグだと感じるのは、実はひとつの文化としてのセットを取り違えているということに由来しているのである。これはこれと結びつき、その他の結びつきはおかしいと

感じることは、いうなれば、ひとつの体系としての文化の中での整合性ということ、認めていることになる。

たしかに、機能的に見る限りみそ汁をスープ皿に入れて、スプーンで飲んでもかまわない。しかし、私たち日本人から見ると、それはどうも変な取り合わせである。ある種のものの組み合わせの中には、変な取り合わせと、変でない取り合わせがあり、それが変でないことと認知されるのは、正しく文化の問題である。その意味では、その組み合わせが正しいか否かが問題ではないのである。その社会の中で、その時代に認められているか否かが問題なのである。このような目でもって、私たちの家庭の中の品々をながめてみると、そこには、正しく日本文化の体系ないしは文化におけるセットの概念を見ることができるのである。

ここでとくに興味をひくのは、私たちの伝統的な文化の中での組み合わせではない。新しく生活の中にもたらされた品々を、どのように組み合わせているのかが問題なのである。

いうなれば、ものには結びつきやすいもの同士の間接関係があるということである。これを私たちの調査から見出ししてみたいと思う。

まず私たちの興味をそそったものにピアノがある。われわれの調査家庭においてはピアノは140軒中17軒にあり、普及率は12パーセントである。これをもう少し詳しく見ると、明らかに家が広くなると、普及率が高くなるのがわかる。さて、このピアノの上は格好のもの置き台である。われわれの写真調査の結果からも、ピアノの上には特徴的な結びつきが認められた。

すなわち、ピアノの上には必ずといっていいほどカバーがかかっている。夏は白いレースの、冬は厚手の上掛けがある。そしてそのカバーの上には、なぜか不思議にフランス人形か、ぬいぐるみの人形が置かれている(図3参照)。どうもこのピアノとフランス人形の結合は、ピアノがわが国にもたらされたときに、ひとつのセットと

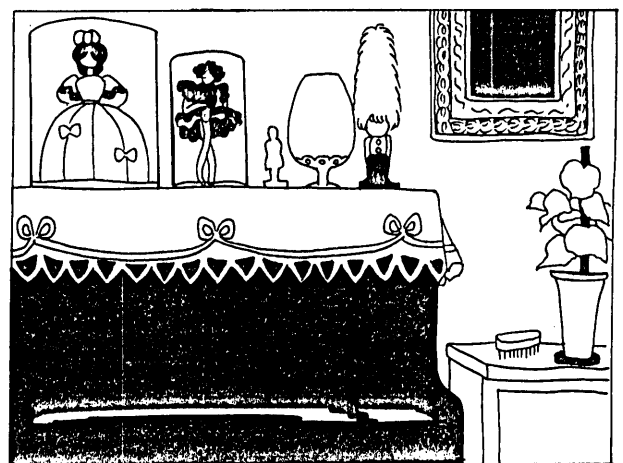


図-3

なって紹介され、それ以降、ぬきがたいイメージ結合を形づくっているのであろう。そしてこのピアノとフランス人形のイメージを提供したのは、大正時代の白樺派ではなかったかと思われる。白樺派が好んでとり上げたイメージの中には、風にそよぐ白いレースのカーテン、カフェの女給の白いエプロン、暖炉の前で飲むワインといった、一連の現代にも通じるイメージを提供してきた。白樺派がいかにハイカラであったかのひとつの証拠として、大正3年に発行された、高村光太郎の詩集「道程」の中に、すでに「ココオオラ」が見られるのである。

概していえることは、この白樺派の人々が生活の理想としたものが、日本人の西洋文化に対するあこがれの原点、ないしはイメージの原像となったということである。そうして、この大正文化人の描いた夢は、第二次大戦において中断し、やがて昭和30年になって庶民の中に実現されていくのである。このような意味において、現代の生活の原点となったのは、実は大正時代なのである。

さて、このようなイメージによるもの同士の結合は、なにもピアノとフランス人形だけに限られたものではない。もっと身近なものとして、テレビがある。それぞれの家庭にあるテレビの上を入念に見てみると、テレビの上には圧倒的に人形が置かれている。(図4, 5, 6, 7参照)。ケースに入った日本人形、ぬいぐるみ人形、こけし人形といった類いが並べられている。テレビが普及したのは、昭和30年代以降であるから、このテレビと人形の結びつきは、ピアノとフランス人形ほど古い話ではない。たかだか20年ほどの間に、テレビと人形というイメージ結合が強くなったのである。

このような例は、玄関における下駄箱についても見られることは、前に述べた。すなわち、今日の玄関にある下駄箱はあたかも床の間のようにになっている。下駄箱の上にひな人形や五月人形が飾られているケースもある。これらはまさしく玄関という空間が、文化的に新しいセットを生み出しつつある状況を物語っているのだ

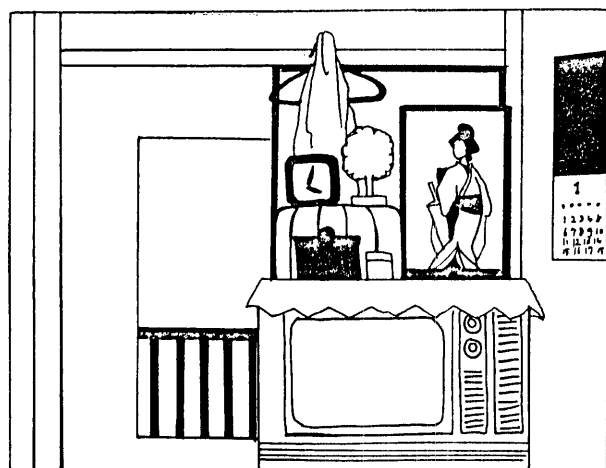


図-4

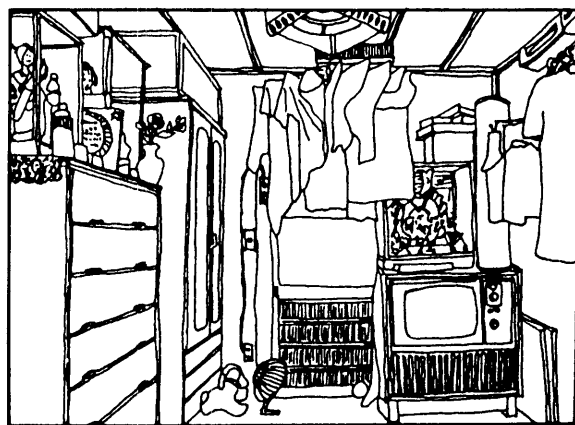


図-5

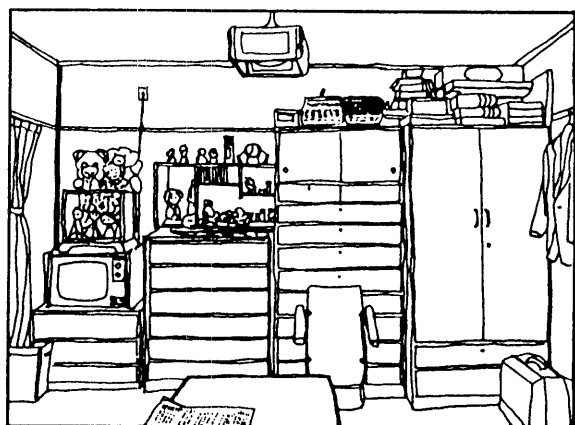


図-6



図-7

る。

私たちの生活の中には、このようなもの同士の組合せ、すなわちセットによって形づけられている部分が少なくない。たとえば、接客用の家具となれば、すぐに応接間が頭に浮んでくる。実際多くの家庭で、ソファーと長いすとティーテーブルで構成された三点セットが置かれていた。そしてこのセットは、非常にかたくなに組み合わせられたものなので、その中から、長いすが欠けるとか、ティーテーブルが欠けるとかといった、選択が行われていないのである。だから結果としては、狭い部屋で邪魔

になっても、律気にこの三つがセットになって部屋に登場してくる。

このセットを生み出している大きな原因のひとつに、日本の嫁入り道具というものがある。嫁入り道具というものは、嫁荷（よめに）とも呼ばれ、これは昔から婚家といえども自由に処分することのできないものであった。そのために嫁入り道具は、現在でも目録を交換して、受け渡しを確実にし、その荷物の搬入は、長持唄をうたって、にぎやかに行われる。東京地方では見られないが、関西では幕をひきまわし、嫁入り道具を紅白のひもでしばって、特に人目を引くようにしたトラックを今日でも見ることができる。

実は、この嫁入り道具が昔からの伝統に従って、ある種のセットを構成している。嫁荷は通常、一荷(か)、二荷と数えられているが、その代表的なものは、和だんす、洋服だんす、夜具一揃え、鏡台、針箱、文箱、本箱、下駄箱などである。それに現代では、ミシン、電気洗濯機、掃除機、テレビなどが加わる。これらは時代とともに変化するが、やはりある種のセットを構成している。

民法の規定にもかかわらず、今日でも嫁入り道具は女性に対する財産分与の性格を帯びている。このように、日本の家に持ちこまれる家具は、これから住もうとする家の広さとはまったく関係なく、財産分与と言う別の論理で持ちこまれているのである。

考えてみれば、ものは、単体で機能することの方が少ないのである。ひとつの道具が、他の道具と組み合わせられて利用される。日本では、包丁にはまな板が付きものであり、その意味では、少なくとも日本ではこの二つはセットである。単体同士がもっと複雑に組み合わせられて機能を果しているときには、それをひとつのシステムと見なすことができるであろう。

この道具同士が、どれほどの結びつきを持っていたかは、皮肉なことに、それが家庭の中から消滅するときに明らかになる。たとえば、戦後台所で大きく変化したものに燃料がある。台所の火力としてガスが導入された結果、台所から七輪が消滅した。しかし、姿を消したのは七輪だけではない。同時に、火吹き竹、じゅうのう、火消し壺、火はさみなども姿を消している。その結果、これらのものがひとつのセットとして存在していたことが確認されるのである。

文化は単体ではない。それはいつでもひとつの結びつきを持ったセットで成り立っているといえるだろう。もし、セットという言葉が不適當なら、それが文化の要素（クラスター）と呼び得るものである。文化の変化は、このクラスターごとに、ゴロリ、ゴロリと入れ変わるものである。そしてそのクラスターは、一部が死ぬことで、全体が死んでしまうようなものである。

ものの配置

家庭景観を分析するに際して、われわれの注意を引く現象があった。そしてそれは、家庭内のインテリアとも大きくかかわったものである。家庭景観をなりたせている大半のものは、大型生活財である。しかし、大型生活財と大型生活財の間、タンスの上や部屋のコーナーなど、いたるところに、ぬいぐるみ人形、こけし人形、飾り皿、トロフィーなど、いわゆる飾り小物が見受けられるのである。そして、これらの物と物との間には、ある種の結びつきやすい関係があるらしいことはすでに述べた。

これらの飾り小物は、見るものの目には、非常に刺激の強いものである。基本的にどの家庭にもある大型生活財を差し引いて景観を見れば、景観を大きく規定しているのは、これら飾り小物であるといっても過言ではないほどである。それでは、これらの飾り小物の持つ意味を考えてみたい。

飾り小物は、実用的な機能を持っていない。強い機能を付与すれば、人の精神を安定させる機能、あるいは、装飾的な機能であるといえよう。そして、ともすれば、装飾過剰ともいえる家庭の中に、なぜこのような装飾品が場所を占めているのであろうか。またそれぞれの飾り小物が、すでに装飾的な機能すらはたしていないような、雑然とした状態で残されている。このように、本来の機能すらはたしていない生活財について考えるとき、その分析を、一面的な機能主義的分析だけで貫くことは、そのものもつ正確な意味を読み取るために、不十分であるといわなければならない。生活者が、実際的な機能をはたさない生活財をもちつづけているのは、その本来的な機能以外に、別の心理的な意味を付与しているからであろう。

ここでわれわれは、物には、それが購入されたときの動機や思い出がつきまとっているものであるということをおぼえてはいけない。家庭の中にある物はすべて、多かれ少なかれその家族成員に忘れ難い因縁話をもっている。別のいい方をすれば、物は物だけで存在するのではなく、つねにそれがもたらされたときの思い出の即物化されたものとして存在しているのである。いうなれば、物は、生活者の思い入れの容れ物なのである。このように考えると、飾り小物は、本来的に実用的な機能を持っていないために、最もこの思い入れが凝縮したかたちで保持される物なのである。

物には命があり、精神が宿っていると考えることは容易なことである。ヒマラヤ山麓のプータンでは、職人は自分の気力が充実するまでは、決して仕事をしない。そして、職人は、同じものを二つとして造らないという。これは、自分のつくったものには魂がこもっていると考えているからである。このように、無生物の世界にも霊

魂の存在を認めるアニミズム(animism)が日本人にもある。日本人の家庭も、多かれ少なかれ、このアニミズムにとらわれている。日本人のアニミズム的世界は、固い布を縫ってきた針を最後は柔かい豆腐につきたてて葬るという針供養のような、限られた儀礼にだけ見られるものではない。日常的な生活のなかにも、そのアニミズム的心情があらわれているのである。物には靈魂が宿っている。だから無暗にその命を絶つようなことをしてはいけない。だからたとえそれが古くなっても、家庭の中に留めおかれるのである。その結果として、物が過剰なまでに家にあふれ、それが、家庭景観から受ける印象を大変雑然としたものとするのである。

いまひとつ興味深い事実は、われわれは、調査において、それぞれの生活財がどのようにして入手されたか、すなわち、自己の意志で家に持ちこんだものであるのか、あるいは、他人からもらったものであるのかを質問した。ちなみに、保有していると答えた者の数で、その生活財をもらったと答えた者の数を割って、パーセントを算出し、これを贈与率と呼ぶことにする。贈与率の上位40位までの内で、飾り小物の順位を示したのが、表1である。これらを見ても、家庭景観から受ける印象を大変混乱させている飾り小物の大半が、他者からの贈り物であることが明らかとなるであろう。

このように飾り小物の大半は、人から贈りものとしてもらう場合が非常に多いのである。物には靈魂が宿っている。ましてそれが他人から贈られたものであるとすると、それを捨てることは、大変勇気のいることなのである。先に述べたように、大型生活財を捨象した景観の大半は、この飾り小物の大半で形づくられている。このように考えると、実は家庭景観を構成している大きな要素は、他人からの贈りものである。極端な表現をすれば、家庭景観は他者からの贈りものによって作り出されているとさえいえるのである。

表一 贈与率の高いもの (40位まで)

順位	品目	普及率(%)	贈与率(%)	順位	品目	普及率(%)	贈与率(%)
5	カレンダー	100	73	28	壁掛織物	26	57
7	博多人形	43	73	29	卓上メモカレンダー	15	57
8	飾りつぼ	28	67	30	ブランド(舶来)	13	56
14	絵皿	46	66	31	ワイン栓抜き	41	55
15	たばこ入れ	41	65	32	たばこ盆	16	55
16	貯金箱	86	63	33	掛軸	17	54
17	金属製角盆	27	63	34	額(絵画)	69	53
20	宝石箱	35	61	37	風鈴	62	53
21	キッチンミット	24	61	38	オルゴール	54	52
25	壁飾りミラー	66	58	39	京人形	35	51
26	卓上ライター	27	58	40	ウチワ	94	50
27	フランス人形	31	57				

日本人の美意識

さらに興味ある点としては、日本人の住居を飾る美意識には、独特のものがあるということである。

まず、典型的な現代日本人の住居の内部を知るために、ふたたび図5、6、7を見ていただきたい。はじめに気がつくのは、部屋のなかにおびただしい量の生活財があるということである。その結果、タンスの上は洋服箱やその他の小物がところ狭しとならんでいる。これはやはり、住居が狭いということが一番の原因であろうが、ただ狭いというだけの理由では理解しにくい側面がある。

日本の家と比較して、たしかに今日のヨーロッパの家庭の居間は、スッキリした空間である。広い室内にゆったりとソファーが配されており、壁に子どもの絵が貼ってあるようなことはまずない。われわれ日本人の目から見ると、大人の感覚でインテリアがなされており、居間だけを見ると、この家に子どもがいるということは感じられないほどである。

ところが、われわれが調査をしたヨーロッパの家庭のスライドを日本の主婦に見せたところ、たいへん面白い反応が返ってきた。すなわち、このようなヨーロッパの家庭の居間は、たしかにすっきりとして美しいが、日ごろの生活をする居間としては、ひややかすぎるという印象をもつというのである。そこでこれらの反応を通じて考えられることは、日本人にとっての居間の意味、ひいては美意識とは何かといった問題である。たとえば、居間を例にとって考えると、それは、子どもにとっては遊びの場であり、また大人にとっては、くつろぎの場なのである。そして、くつろぐということは、ある種の弛緩を意味しているのである。

実際、われわれのビデオによる行動観察調査においても、日本人が好んでするくつろぎの姿勢は、身体を伸ばすことであった。たとえば、冬の居間では、三点セットのティーテーブルをかたづけてしまって、そこに炬燵をおく。そして、ときには、ソファーを背もたれにして、炬燵に入る(図8)。大半のんびとは、長々とねそべて

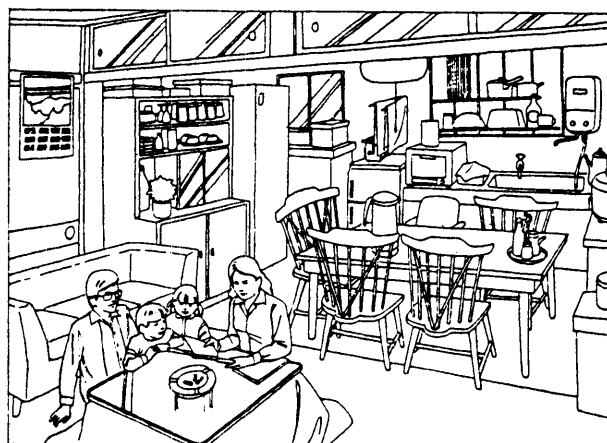


図-8

くつろいだ姿勢をとるのである。このように日本人にとって、茶の間や居間は住み心地のよいものでなければならない。そのためには、くつろぎの空間が多少ちらかっていても、大目に見ようと考えているのであろう。

それに対して、ヨーロッパの居間のように、スッキリとした美しさを保つというのは、ひとつの姿勢を貫くことである。美しさを保つということは、ある種の緊張の維持を意味する。日本人は居間や茶の間といったウチなる世界のくつろぎの場で、そのような緊張をとまなう美を云々することは矛盾していると考えているようである。

だからといって、日本人の住まい全体が、昔から雑然としていたとか、あるいは、日本人は生活の場に美の意識がなかったというのは、大へんな誤りである。日本人は、生活の場における美の意識を持っていたが、その実現に際しては、また違った考え方をしていたのである。すなわち日本人は、スッキリとした美は生活の場とは違った別の場で実現させるべきであると考えていたようである。それは、住居の中でいうと、座敷によく現れている。

先に述べたが、本来、座敷とは、めったに使われることのない部屋であった。子どもが座敷などで遊ぶのはもつてのほかであり、座敷を用いるのは、お客のとき、正月などの改まった場合に限られていた。そのようなハレの日でもないときに、座敷に呼び入れられるということは、たいい父親から説教をされるというような、あまりありがたない場合であった。このように座敷とは、居間で見られた居心地優先の原理と異なった、まったく別の生活の原理、すなわち、徹底したハレ（晴）の原理によってつくり出された空間ということができるであろう。そこには、居間のもつケ（藝）の雑然さとは対極をなすハレの世界が存在していたのである。座敷における美しさの一番よい例は、夏座敷であろう。ふすまや障子を取払い、青畳の上にはとうむしろを敷きつめる。室内にはタンスなどの家具はいっさいなく、すだれ越しには打水をした庭がみえる。このような夏座敷の美を一言で述べるならば、それは非在空間の美、すなわち簡素の美の極致ということができる。

このような簡素の美には、ひとつの系譜がある。それは、伊勢神宮、桂離宮といった伝統的な建築物から発して、茶室、そして庶民の生活のなかの座敷へとひきつがれるある種の流れが存在しているのである。またこの簡素の美は禅宗と結びついて思想的背景を持ち、千利休の侘茶となって、ひとつの美の形式を獲得していった。それに加えて、明治以来、岡倉天心やブルーノ・タウトによって、簡素の美こそが日本美の真髄であると位置づけをされて以来、この簡素の美が高尚な美となったのである。

しかし、日本人の美意識を語るとき、この簡素の美だけを伝統的な日本人の美の形式であるとするのは、やはり、ひとつの側面しか見ていないということになるのである。つまり、このような簡素の対極として、一方には飾り込みの美の形式もまた存在していたことも事実である。この飾り込みの美もまた、われわれの生活の中で長い伝統があるのである。日本人の飾り込みの美の起源は、古くは縄文式土器にあると指摘する人もいる。たしかに、縄文式土器を見ているとあの装飾過多をよしとする文化があったのかもしれない。そして、装飾の少い弥生式土器の出現は、農耕文化の出現と同じ程度の衝撃をもって古代人の美意識のうえに大きな変革をもたらしたできごとであったことも考えられる。しかし、古代人の美意識はさておき、われわれがこのような飾り込みの伝統を近世の事象からさぐるとすれば、町奴、倶利伽羅紋々（くりからもんもん）の入れ墨文様、歌舞伎の世界、くるわ、日光東照宮、お寺の内陣や仏壇のなか、そして今日の霊柩車の装飾 [井上 1983] へとつづく流れと指摘することができよう。

このように飾り込みの美もまた、簡素の美が尊重されたように、われわれの生活のなかで大きな位置を占めていたのである。あるいは、簡素の美と飾り込みの美は、つねに対をなしていたともいい得るであろう。簡素の美を旨とする茶室の裏には、使う道具をすべて並びたてる水屋飾りというものがある。この場合、水屋はまさしく台所にあたる。そのような空間を、ものを並べたてて飾ろうとすることは、表の茶室の美意識とは、まったく正反対のものであり、大へん興味深い。このように日本人の心のなかには、飾り込みの美に対する、抜きがたい好みを脈々と持ち続けていたことを忘れてはならないであろう。われわれが現代日本人の住居、とりわけその居間のなかで見たものは、まさしくその飾り込みの流れをくむものであった。しかしこの飾り込みをよしとする好みは、何も日本だけに限ったものではなく、ヨーロッパにもそういう時代があったのである。ヴィクトリア時代のイギリスの家庭は、今日の日本人の家庭以上に飾りたてられたものであったという。部屋の壁は油びきの壁紙でおおわれ、そこには、その家の主人が猟で仕留めた獲物の剥製が飾られており、だんろの上にはその家の子どもたちの思い出の品々が並べられていたのである。ヴィクトリア時代のイギリスの家庭はまさしく家族にとっての思い出の博物館なのであった。

ブルーノ・タウトの見解

ブルーノ・タウトは『日本建築の基礎』のなかで、イギリスの家庭を次のように述べている [タウト 1962]。

(西洋の建築家)には、50年前に学者達のいだいてい

た観念、すなわち世界は芸術品で飾りたてられた博物館であるという考えが、今なお膠着している。そこでかれらは、住宅に多くの骨董品を並べたてて、まるで住宅を一個の博物館にでも仕立てようとするかのようである [9ページ、カッコ内は筆者加筆]。

と述べ、驚くべきことに、この飾りたてられたイギリスの家庭が、今日見られるようにスッキリしたものになったのは、日本からの影響であったとブルーノ・タウトは指摘しているのである。すなわち、タウトは日本人の家について、次のように書いている。

日本人の部屋は、平常は「虚」である。過去のどんな追憶も仄暗い隅々にまつわっていることがない。なるほどここには西洋の家庭に見られるような「住み心地よさ」は欠けている。数多くの家具、絨毯、カーテン、テーブルクロス、クッション、絵画、壁掛などは備えつけていない。部屋全体がすっきり開き放たれていて、通気は自由である。それだからこそ、あたかも白い捏粉でも印したように、あるいは壁にあるいは部屋の隅々に点染して、ややもすれば住む人の心を圧迫する追憶もまた存しないのである [12~13ページ]。

さらに、

……日本こそ1900年このかた、その伝統とする単純性を持って、古くさい衣裳をつけた仮装会にも似た百鬼夜行の状態を脱却しようとするヨーロッパのきわめて真摯な試みに、最も大きな寄与を致した国である [8ページ]。

と述べ、

西洋の真摯な建築家に最も大きな影響を与えたところのものは主としてこれ（簡素の美）であった。ヨーロッパおよびアメリカにおける現代的な室内建築は、その沿革を実に日本に求めたといつてさしつかえない [13ページ カッコ内筆者加筆]。

といい切っている。すなわち、イギリスの家が今日見られるようにすっきりとしたものになったのは、じつに日本の家のもつ簡素の美によるものであったというのである。このタウトの指摘は、今日の飾り込まれた日本の家を知る者の目にはにわかに信じ難いことである。

たしかブルーノ・タウトは、日本の美の真髄は簡素の美にあると主張した。そしてそれ以降、今日ではこの考え方が、ほぼ人びとの認めるところとなっていると思われる。しかし、このブルーノ・タウトの簡素の美こそが日本の美の真髄であるとする見解は、当時の日本人に素

直に受け入れられたのであろうか。このことに関して、タウトも、当時の人びとの興味深い反応を紹介している。

東洋古代建築の最高権威の一人である伊東（忠太）博士は、近ごろ日本のある専門雑誌で、ほぼ次のようなことをいわれた。——「50年前にヨーロッパ人が日本へ来て、日光廟（東照宮）こそ日本で最も価値ある建築物であるといえ、日本人もまたそうだといい、今またブルーノ・タウトがやってきて、伊勢神宮と桂離宮こそ最も貴重な建築だといえ、日本人もまたそうだと思うのである」——と [2~3ページ]。

そして、この伊東博士の当惑に対して、タウトは、

これはわれわれヨーロッパ人の体系的叙述を凌駕するまことに巧妙な東洋的アイロニーである [3ページ]。

と日本人のとまどいを皮肉っているのである。

しかし、私には、この記述、とりわけ当時の日本人の当惑が、よく理解できるのである。昔から日本人は日光東照宮も、伊勢神宮も桂離宮も、ともに美しい存在だと感じていたし、また今日もそう感じているのではないだろうか。

つまり、私は日本人の美意識のなかにまったく相反する二つのものがあることを認めたいのである。つまりそれは一言で述べると、日本人はたいへんスッキリした簡素なものが好きである。しかし、まったくそれと同等に、飾り込まれたものも、大いに好む傾向があるということである。いうなれば、日本人は美に関して、アンビバレンツ（両価性）を持っているのである。さらにつけ加えると、今日の日本人は、スッキリした簡素な美のほうが上等文化であると価値評価をしているようである。すなわち、先にも述べたように、簡素の美が伝統的に禅や茶の湯、そして武家文化と結びついたこともあって、表の文化であると考えている。これに対して、飾り込みの美、ないしは並びたての美は、つねに世俗的なもの、洗練されていないもの、あるいは裏の文化として位置づけられているのである。

私は日本の美を、ブルーノ・タウト以来の伝統にしたがって、簡素の美の側面においてのみ評価しようとするのは、片手落ちであると考えている。日本人の美意識のなかに脈々と生き続けてきた、飾り込みの美をも再評価する必要があるのではないだろうか。

この二つの美の形式が、ある種の緊張関係をたもち、相互に触発して、美の意識そのものを高め、今日までに多様な美をつくり出してきたと考えられるのである。

〈参 考 文 献〉

- 石毛直道 1971「住居間の人類学」SD 選書 鹿島出版会
石毛直道 1976「住居と住生活」講座・比較文化第4巻
『日本人の生活』研究社
井上章一 1983「壺柩車の考現学」『空間の原型』筑摩書
房
栗田靖之 1977「物質文化から見た家庭」『国立民俗学博
物館研究報告』二巻四号
中根千枝 1970「家族の構造—社会人類学的分析—」東
京大学出版会
商品科学研究所+CDI 1980『生活財生態学 現代家庭
のモノとひと』リプロポート
商品科学研究所 1983『生活財生態学II—モノからみた
ライフスタイル・世代差と時代変化—』商品科学研究所
タウト, ブルーノ 1962 増補改訳版『日本美の再発見』
岩波書店